

# KIHS

A photograph of a modern, multi-story building with a textured facade, partially obscured by the letters 'K', 'H', and 'S' of the 'KIHS' logo.

## NEWS LETTER

甲南大学人間科学研究所  
Konan Institute of Human Sciences



2006  
Vol. **08**

2005年度もいよいよ最終コーナーを過ぎようとしています。

甲南大学人間科学研究所ではこの1年間、

「感性の変容」と「アメリカのあり方とグローバリゼーション」という

ふたつのテーマを中心に、研究を積み重ねてきました。

2月末、その総仕上げとして2冊の論文集を出版します。

ニュースレター第8号では、その内容をみなさまにいち早くご紹介します。

# 花の命・人の命

## ——土と空が育む



編者：斧谷 彌守一 (甲南大学文学部／言語論)

**日** 本人は戦後、高度成長の世の中を生きる過程で、伝統的なものを捨ててきました。昔どおりの祭のやり方や家族の行事のやり方を、多くの人が忘れてしまっています。圧倒的な勢いで流入してきた西洋文化の影響も大きいでしょう。それとともに私たちの感性は刻々と変容し続けているのです。しかし、根底から覆されてしまったわけではなく、時代を超えて脈々と流れ続けている感性もまた存在するはずで

たとえば花を愛するという感性があります。花のどのような要素がクローズアップされるかは、時代や場所、人により違いはあるものの、花はいつの時代にも私たちの身近に存在し、愛されてきました。花は日本人の感性・美意識の中心を占めるテーマとして、万葉、古今以来、さまざまに歌われ、描かれ、演じられ、論じられてきたのです。はかないこと、美しく散ることをよとする「散華の美学」はそのような中で培われてきました。現代人は、東洋の花鳥画や和歌を「穏やかで美しいもの」「衛生無害な微温的なもの」として受け止める傾向があります。

しかし、こうした無常の美学が日本の美意識の全てでしょうか。たとえば「ひさかたの 光のどけき 春の日に 静心なく 花の散るらむ」という歌は、一般には、はかなさの美をのどかに歌っているように解されています。しかし、この歌に耳を澄ましていると、広大な光の情景の中に包み込まれつつ桜の命と人の命が同調し、共振し始めるのが感知されます。それは切なくも激しい「命」の振動であって、単に無常な「散華」や、はかない花の死の情景ではありません。ましてや単なる衛生無害な美しさ、お題目としての「はかなさ」ではないのです。

花はまた、さまざまな器物を「かわいく」「美しく」飾るものとして使用されてきました。しかし飾りとしての花は、もともとそのような飾りに過ぎなかったわけではありません。飾りとしての花は、「生命」としての花というあり方から枝葉末節へと頽落した姿に思われます。阪神・淡

梶井基次郎「桜の樹の下には」について  
——コノハナノサクヤビメとのかかわりをめぐって

金関 猛

ウチナンチュ沖繩人の心——テダが花

高阪 薫

花々の命の営み

田中 修

花がころを開く

——環境療法(Milieu Therapy)と園芸療法(Plants Assisted Therapy)

浅野 房世

舛次崇と植木鉢の花——アウトサイダー・アートに花を探す

服部 正

複式夢幻能における〈花〉

川戸 圓

花のコスモロジー

加藤 清

花が花開く・言葉が花開く

——「たま」をめぐる式子内親王／東直子の歌

斧谷 彌守一

「理性」という徒花?——人間の危うさ

岩城 見一

第6回公開シンポジウム

花の命・人の命——震災10周年を記念して生命(いのち)を考える パネルディスカッション

路大震災の時を思い出してみましょ。震災直後、あまりにも悲惨な状況の中では植物に目の向かなかった人が多いでしょう。しかししばらくすると、春の訪れとともに、瓦礫の傍らに植物が芽生え、花の咲く様に気づくようになりました。その様は、傷つき疲れた人々の心に生きたいという強い思いを喚び覚ましたのです。花は大地に根ざし、天空に向かいます。植物は土の中から芽生え、茎を伸ばし、その末端に花を咲かせます。その花は、滅びの前に次世代を産み出すための生殖器官であるがゆえ、花の美しさには生々しい生と死が宿っています。岡本かの子は「桜ばな いのち一ぱいに 咲くからに生命(いのち)をかけて わが眺めたり」と歌っています。まさしく、花の「命」と人の「命」が交感し合う「一所懸命」な姿です。植物と人間は、同じ「生命」として交感し合うことができるのではないのでしょうか。

本書は、「花の命」の生々しさと「人の命」の生々しさとの関係性を基軸に、現代日本の感性のあり方を考えてみようという問題意識から編集されました。美学、文学、生物学、園芸療法、臨床心理学、精神医学などさまざまな分野の論者にご参加いただきました。2004年7月から研究会を重ね、2005年7月24日には、兵庫県立淡路景観園芸学校との共催で公開シンポジウム「花の命・人の命——震災10周年を記念して生命(いのち)を考える」を開催しました。それらを踏まえ、単に美しく「飾り」、美しく「散る」ということに終わらない「花」に関する論集がここに完成しました。

# 心と身体の世界化



編者：港道 隆 (甲南大学文学部/哲学)

**グ**ローバリゼーションは現在、日本にとどまらず世界中で社会のあり方を規定しています。本書は、グローバリゼーションの動きを問い直し、現状とは別の可能性を求める試みとして編まれました。グローバリゼーションは、現代人の心の危機に関する研究を行う当研究所で取り上げるには大きすぎるテーマに見えるかもしれませんが、あるいは、グローバリゼーションは経済、政治、法律等の次元で起こることであり、文化や心理に携わる研究者には縁遠いと思われるかもしれませんが、しかし決してそうではありません。いまを生きる私たちひとりひとりの心と身体が、国家、市民社会、地域社会のみならず、国家を超える次元の複雑なからみあいによって決定されていることは明らかです。たとえば、欧米でも日本でも、スーパーマーケットには世界中の食品が氾濫し、食の安全性は揺らいでいます。グローバリゼーション過程において触発され問題になっているのは、心と身体との双方を規定する感受性なのです。

グローバリゼーションを人、金、物、サービス、情報が易々と国境を超える現象として捉えれば、そこにはポジティブな面と可能性が含まれています。世界は、人種も民族も異なる人々が同じ社会に共存する可能性を、少しずつ現実のものにしてきました。それによって、差別と戦争のもとになってきた近代国民国家の原理が、もはや強固なものではなくなってきたのです。しかしそのことは、世界に明るい未来を約束しません。現在、新自由主義と呼ばれる資本主義が押しつけるグローバリゼーションは、逆に世界中で不幸をもたらしつつあるのです。新自由主義は「世界」を一つにするどころか、「世界」を分断し、格差を拡大し、紛争を引き起こします。労働運動が衰弱し、雇用形態が変化し、資本は膨れ上がり、それが好景気と呼ばれます。民の生活が見捨てられて、社会不安・心理不安が増大し、新たな「草の根」国家主義が台頭してきます。こうしたことは、日本社会において、現政権の「構造改革」の名の下に典型的な形で展開しているのです。

もうひとつの世界はほんとうに可能なのか？

——オルター・グローバリゼーション運動の現在

コリン・コバヤシ

ウィリアム・バロウズは地域通貨の夢を見るか？

——紙幣に見るアメリカのグローバリゼーションとオルタナティブ

秋元 孝文

四足の時代に戻る人間——「システム」を解読する試み

田口 哲也

グローバリズムとアメリカの精神分析

川畑 直人

抽象への逃走——脱規範的思想傾向のメタクリティーク

西 欣也

「書くこと」へ

石原 みどり

「主人」と「奴隷」の解放——グローバリゼーションの弁証法

増田 一夫

肯定と抵抗——序説

港道 隆

特別企画研究会

『デリダ、異境から』(D' ailleurs, Derrida) 上映会&トーク

この動向は、近い将来、深刻な政治-経済-社会-環境問題としてすべての人々に回帰してくるでしょう。すでに鉄道における惨事、建築業界における犯罪、刑事犯罪の氾濫、「日の丸・君が代」の強制、ネット問題と一部の富裕層における「人生ゲーム」の流行として表面化しています。

日本の中だけで発想する時には、突破口がないかのように感じられるこの状態にも、世界に目を転じればさまざまな抵抗運動があり、さまざまな対抗案が提案されています。本書では、グローバリゼーションに対抗して別の可能性を実現しようとするオルター・グローバリゼーションの運動も視野に収めています。タイトルの「世界化」とは、心と身体レベルから私たちが規定しつつあるグローバリゼーション、そして別の可能性であるオルター・グローバリゼーションの両方を日本語で言い当てようとした表現なのです。

私たちは2004年7月からグローバリゼーションをテーマとする研究会を重ねてきました。本書の執筆はそこに参加してくださった方々にお願いしました。つまり本書は単なる論文集ではなく、一連の研究会の成果と言えます。論者から寄せられた個性豊かな論文は、文化レベルで議論が展開されています。そのため、グローバリゼーションの問題を経済的、政治的、社会的な文脈で論じてきたこれまでの論集とは、一線を画した一冊となりました。



## ※これまでの活動

2005年10月～2006年2月

### 研究会

#### 第23回 グローバリズムとアメリカの精神分析

日 時：2005年10月28日(金)  
講 師：川畑 直人  
(京都文教大学/臨床心理学・精神分析学)

#### 第24回 共同体/感性/無意識

——戦後日本の意識変容への批判的パースペクティヴ  
日 時：2005年11月18日(金)  
講 師：西 欣也  
(甲南大学/文学・芸術理論)

#### 第25回 御伽草子と説教に見る母子関係の諸相

日 時：2005年12月12日(月)  
講 師：田中 貴子  
(甲南大学/日本中世文学・中世宗教文化)

### 園芸療法研修会

#### 第3回 園芸療法の実践

——6歳の子どもの事例から

日 時：2006年2月9日(木)  
講 師：浅野 房世  
(兵庫県立大学・兵庫県立淡路景観園芸学校  
/園芸療法)  
企 画：高石 恭子  
(甲南大学/臨床心理学・学生相談)  
共 催：甲南大学学生相談室

## ※これからの活動

### 研究会

#### 第26回 子育ての困難と働き方(仮題)

日 時：2006年3月10日(金)  
講 師：中里 英樹  
(甲南大学/家族社会学)

### 心理臨床ワークショップ

#### 第3回 ト라우マ臨床と 精神分析的アプローチの齟齬

日 時：2006年3月19日(日)  
講 師：奥寺 崇  
(赤城高原ホスピタル/精神医学)  
企 画：森 茂起  
(甲南大学/臨床心理学)  
共 催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム  
後 援：兵庫県臨床心理士会

### 公開シンポジウム

#### 第7回 育てることの困難

——今、私たちに求められていることは何か(仮題)

日 時：2006年7月23日(日)  
シンポジスト：斎藤 環  
(爽風会佐々木病院/精神医学)  
(予定) 汐見 稔幸  
(東京大学/教育学)  
高石 恭子  
(甲南大学/臨床心理学・学生相談)  
中里 英樹  
(甲南大学/家族社会学)  
指定討論：中井 久夫  
(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)  
(予定) 北原 恵  
(甲南大学/表象文化論・美術史・ジェンダー論)  
司会(予定)：穂苅 千恵  
(甲南大学/臨床心理学)  
企 画：高石 恭子



### 【編集後記】

先日、鹿児島へ行ってきました。柔らかな南国の日差しの中、桜島を望む温泉に浸かりながら、神戸よりも少し近くまで来ている春を感じました。春を待ち望みながら、今年度締めくくりのニューズレターをお届けします。今回ご紹介した<心の危機と臨床の知>第6巻、第7巻を既刊の5巻(左写真)と共にぜひお手に取っていただけたらと思います。そして来年度もKIHs甲南大学人間科学研究所をよろしく願いいたします。